

CSR活動を通して“奉仕”と創造を実践していきます。

「平和堂CSR報告書2015」に対し452名の読者からアンケートの回答をいただきました。

2015年度も平和堂の経営理念「5つのハトのお約束」をテーマに、「奉仕」「創造」「感謝」「友愛」「平和」の5項目に章立てしました。

また、平和堂イメージキャラクター「はとっぴー」を適所に配し、「楽しく・読みやすい」レポートづくりをめざしました。さらに、2014年度の活動の中から特に伝えたいことをハイライトとして掲載しました。



CSR報告書2015

「わかりやすい」
3.2
ポイントUP

「内容の充実」
4.3
ポイントUP

トピックス



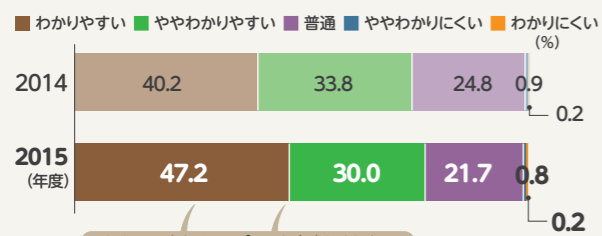
滋賀県立大学の学生さんとCSR報告書について意見交換しました。

2015年7月1日に行なわれた滋賀県立大学「環境マネジメント演習」において、環境科学部の学生約20名からグループ毎に平和堂CSR報告書と他社の報告書を比較し評価と改善提案をしていただきました。「もっと活動内容がわかる写真の掲載」「インデックスがわかりづらい」「今後の目標の掲載」などの改善点や評価をいただきました。

いただいたご意見は2016年版の制作の参考とさせていただきます。

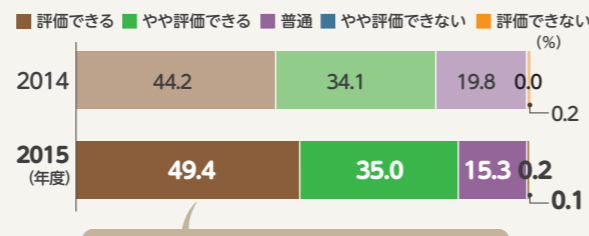
アンケート集計結果

わかりやすさ



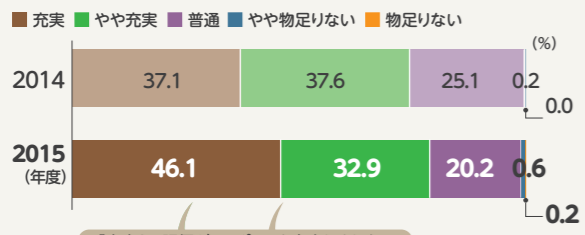
わかりやすさは3.2ポイント向上しました。

平和堂のCSR活動への評価



読者の84.4%が評価できる・やや評価できると回答。CSR活動への理解が深まりつつあることが分かりました。

内容の充実度



「充実」の評価が4.3ポイント向上しました。

印象に残った、または興味をもたれた内容

ベスト5

- ①平和堂ホーム・サポートサービスの充実 (219)
- ②トップメッセージ (188)
- ③平和堂ストアブランド「E-WA!」誕生 (174)
- ④平和の森づくり (162)
- ⑤太陽光システム (123)

(回答者数452名 内訳:社員400名、学生・お客様など31名、株主・投資家様3名、行政・研究・教育機関2名、お取引先様1名、その他3名)

二本立ての報告書

平和堂CSR報告書は昨年に刊行16年目に至り、往時の表現によれば「元服」を迎えたこととなります。そうしたタイミングを反映するかのように、今年の報告書は印刷された冊子版とそうではないWEB版との二系統のものとなり、企業として社会に届けるべき情報の選択と提示方法が意識され始めたと考えて良いのでしょうか。二つの版を見比べる限りでは、冊子版は一般消費者に分かりやすい部分に集中し、WEB版はさらに経営的な展望につながる資料内容が加えられる構成を備えてこれまでにないページ数となっています。

次第に内容が充実するに伴い、その複雑多様化は避けられず、二本立てで対応を図るのは今日の情報化社会のあり方を考える上では合理的な方針で、今後の発展のためにも大いに賛意を表するものです。

見やすい誌面と多様な登場人物

平和堂のCSR報告書の特徴の一つは早くから定量的な表現方法が徹底していることです。それに加えて今年はこれまで以上に写真や図版による積極的な表現を通じ、高いレベルで「見やすさ、分かりやすさ」を実現し、この点ではトップレベルにあるとしても過言ではないでしょう。

もう一つの特徴は、誌面に登場する人物が読者に語りかける場面とその言葉が次第に増えてきていることです。経営トップ、従業員、取引業者、教員、音楽家、サービス会員、などなど。それこそ、「顔が見える報告書」の途を進む様子が、地域密着型の説得力あるスタイルとなっています。それだけにこの報告書を社会に返す方法を真剣に考えないと、いかにももったいないというものです。

第三者意見を受けて

「平和堂CSR報告書2016」への評価と貴重なるご意見を賜り、ありがとうございました。本報告書は、今回で17回目の発行となりました。

今回の報告書では、当社を取り巻く様々な課題を把握し、整理したうえで、あらためて「5つのハトのお約束」を平和堂の重点課題とし、それぞれの取組みについて掲載いたしました。あわせて、情報により冊子版とWEB版を作成いたしました。

そのことへの一定の評価をいただき、今後も内容の充実と信頼性の向上につとめてまいります。

また、ご指摘をいただきました、「エシカル消費」についての取組みや、環境経営に関する分析など、十分に反映できていない情報も含めて、全体のビジョンの見直しと、さらなる改善を進めてまいります。

今後も社会に必要とされる充実したCSR活動となるよう、推進してまいります。

滋賀県立大学 名誉教授
土屋 正春

プロフィール

1943年生まれ。滋賀県立大学環境科学部長、副学長を経て現在は名誉教授。水資源・環境学会会長、公益財団法人千里リサイクルプラザ研究所所長・総括主任研究員、一般社団法人滋賀グリーン購入ネットワーク名誉会長



報告書企画力の強化を

報告書としての今後の発展を考えると、たとえば環境経営に関する資料など冊子版にはなくWEB版にはある部分が全体の流れからは遊離した印象があり、その分析を十分に反映できていないことなど構成上から見てもつたない面があることは一考の余地があります。

また課題についていえば、次世代も含めた持続的な消費社会を建設するための一端を担う訳ですから、いわゆる「エシカル消費」のリード役をどう果たすのかなど、個別には対応商品は平和堂の店頭にあるので、時代に即した新しい整理の仕方も必要だと考えます。

プライドの拠りどころとしての平和堂

地域社会から「平和堂があつてよかった」という支持を得ること自体が事業目的と表裏一体化しているのですが、この実現にはいろいろな意味で大変なコストがかかることには違いなく、たとえばホーム・サポートサービスの内容などを知ると今後の時代を見据えたチャレンジだと言えます。

こうしたチャレンジが事業として社会に定着することで、平和堂、取引業者、そして顧客から組み立てられている信頼のトライアングルが、それを支える人々にとってのプライドの拠りどころになるように育つことを願うばかりです。



常務取締役
管理本部長兼開発本部長
木村 正人